

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 韓東育

本論文「徂徠派経世学の研究——「日本近世新法家」の展開」は、徳川中期の思想家・荻生徂徠およびその後学（太宰春台・海保青陵）について、その経世理論の展開過程を思想的に跡づけた研究である。従来、徂徠学は徳川思想史において従来の学問の地平をつき動かすきわめて革命的な哲学・政治論を構築したのものとして、丸山真男氏らによって注目されてきた。が、その位置づけは、西洋思想をモデルにして、近代意識が見られる、あるいは朱子学を日本化している、といった視点にとらわれていた。これに対して本論文は、近代化論でも日本化論でもない、徂徠学派に即した把握を提唱する。すなわち、徂徠たち自身の歴史的社会的文脈および彼らの思想的リソースとなった中国思想の諸言説を洗い出す。そして、徂徠らの革新的な理論に、じつは荀子から韓非子、老荘思想が大きな影響を与えていることをテキストに遡って指摘、徂徠派の経世学が一種の「法家理論」として展開していることを論証した。

第一章では、徂徠の学問生活が、少年時には南総の農山漁村、中年期にかけては幕府政治に近い環境で営まれたことから、その思想が従来の正統的儒学の観念論を乗り越え、民衆の生活世界的現実到底礎したこと、そして孟子系の心学よりは荀子系の制度論が選ばれていったことを述べる。第二章・第三章では、徂徠の理論に立ち入り、人間論として感性的な「人情」論が展開されたこと、礼を中心とする制度論や政治優位論があらわれたこと、過去の歴史を参照しつつ現実を意味づける学問方法論が生まれたこと、などを述べ、これらに荀子・韓非子・呂氏春秋などが影響を与えていることを指摘した。また、徂徠が当時の商品経済・都市化を正面から問題化しつつも、これを抑制する制度論を説いて矛盾に逢着していることを述べる。第四・五章では、徂徠の高弟太宰春台において、徂徠の出会った困難をさらに打開すべく、一方で自然理論が探求され、また制度論の柔軟化がはかられ、そこに法家・老荘などの導入がはかられていることを述べる。第六章では、徂徠の孫弟子海保青陵において、徹底した功利的・合理主義的な理論が展開し、そこに老子を取り込んだ法家、すなわち道法家の言説が影響を与えていることを論証している。また終章にかけて、徂徠学派に韓非子らとは違った、包括的な学問論があり、また商業の問題に正面から取り組んだ政治論、自然を基礎にした公論の探求がみられることなどを指摘している。

本論文の最大の達成は、近世後半期から近代に至る日本政治思想の展開において、従来、無視されがちであった中国古代思想の影響を説得的に論証した点、しかもその影響の内実が、中国では異端視された法家理論の武士政権下における展開で、それが日本近代に向か

う政治思想に重要な選択肢を与えていることを論証した点である。これは、従来の日本人の近世日本思想史研究の欠落を埋めたものであるのみならず、東アジア政治思想史の全体にとっても、制度学派・法家理論の伝統の展開可能性を歴史的に明るみに出したものとして高く評価することができる。他方、中国古代とくに法家への引照に焦点を注ぐあまり、徂徠学派に見られる、共同体論、また明清学・洋学・屈折的に受容された朱子学、当時の歴史状況などの多角的な文脈がやや看過された嫌いがある。が、これらは、本論文をより複合的に位置づけるため今後探求されるべきものではあるが、本論文の主旨自体を損なうものではない。本論文は徂徠学派および日中の法家思想研究に画期的な地平を開くものであり、本審査委員会は博士（学術）を授与するにふさわしいものであると認める。